

【六戸町立七百中学校区】

学校名	校長・氏名	担当者職・氏名
六戸町立開知小学校	校長 内海 浩幸	教頭 工藤 博幸
六戸町立大曲小学校	校長 二ツ森 牧彦	教諭 角鹿 峻輔
六戸町立七百中学校	校長 松木 信嘉	教諭 前田 大輔

I 校区の概要

六戸町立七百中学校区は、小学校2校と中学校1校がある。校区の中で高齢化が進んでいる地域（七百地域）と新興住宅地で人口が増加傾向にある地域（小松ヶ丘地域）がある。六戸町立七百中学校区の現在の児童生徒数は、開知小学校75名、大曲小学校331名、七百中学校158名となっている。令和7年4月に、六戸町内の小学校3校と、中学校2校が統合し、義務教育学校六戸学園が開校する。開校に向けて、開校準備委員会や南部北部合同小中学校連絡協議会を開催し、各校の教育課程や行事の統合、指導方法の共通理解等を、六戸町教育委員会主導のもとに行っている。

1 各校の教育目標と目指す学校像

(1) 開知小学校

① 教育目標

「夢に向かって あすをひらく 開知の子
一、思いやる子 一、学び合う子 一、けんこうな子」

② めざす学校像

「【子供が】自らの成長を実感でき、夢と希望とやる気をもって登校し、満足できる学校」
「【教師が】児童の成長に手応えを感じられ、児童・保護者・地域から信頼され、やりがいを感じる学校」
「【保護者が】児童のよりよい変容を確認でき、安心して子供を託せる学校」
「【地域が】地域と学校との結び付きを実感でき、将来にわたり誇りをもてる学校」

(2) 大曲小学校

① 教育目標

「自他を愛する子 自ら学ぶ子 自らきたえる子」

② めざす学校像

「子どもが主役の学校」
「全職員一体感のある学校」
「コミュニティ・スクールのもと、地域に開かれた学校」

(3) 七百中学校

① 教育目標

「健やかな生徒 自ら学ぶ生徒 人を思いやる生徒」

② めざす学校像

「生きる力と夢を育む学校～よく学び、よく活動し、明るく楽しい七百中～」



開知小学校



大曲小学校



七百中学校

2 七百中学校区における小中連携の推進

- (1) 義務教育学校六戸学園開校に向けて、六戸町の学習のスタンダードを作成し、町内全ての小・中学校で定着と活用を行っている。
- (2) 義務教育学校六戸学園開校に向けて、家庭学習や生活習慣の目標を統一した「9か年計画」を作成し、家庭や地域と連携する体制を構築している。
- (3) 小・中学校の円滑な接続に向けて、町内小・中学校のより一層の交流・連携を充実するとともに、「南部北部合同小中学校連絡協議会」を開催し、具体的な教育課程を検討するなど、六戸学園の開校に向けた準備を推進している。

II 研究の概要

児童生徒が、学校生活を楽しめるための「絆」を育み、主体的に授業に取り組むことができるための「居場所」をつくることで、不登校やいじめの未然防止に向けた取組を、教育活動全般を通して計画的に実施していく。

1 すべての児童生徒に対する取組

不登校を未然に防止するために、児童生徒が学校に行きたいと感じられるような魅力ある学校づくりを進める。

- (1) すべての児童生徒が落ち着いて学べる場をつくる（居場所づくり）
 - ① How to 型（探究型）の課題を設定し、課題解決の必然性と意欲をもたせる。
 - ② 町内全ての学校で、ハンドサインの活用と定着を図ることで、児童生徒が自分の考えや思いを表現しやすい雰囲気づくりを行う。
 - ③ 個→集団→個の探究で、児童生徒が様々な見方・考え方ができるような場を設定する。
- (2) すべての児童生徒が活躍できる機会をつくる（絆づくり）
 - ① 夏休みに中学生が小学校に出張し、学習指導を行うサマースクールを実施する。
 - ② 小学校6年生が中学校に出向き、授業や清掃体験を中学生と一緒にやる場の設定をする。
 - ③ ZOOMを活用し、小中学校合同で挨拶運動を実施する。

2 不登校支援としての取組

- (1) 日常の観察から気になる児童生徒は、家庭と情報交換を行う。
 - ① 教育相談を年2～3回実施し、個々の児童生徒のもつ悩みや困難の解決を援助することによって、学校生活によく適応させ、人格の形成への促進を図る。
- (2) 欠席者に対して、初期対応を必ず行う。
 - ① 欠席者に対しては、電話連絡により、翌日の日程や持ち物の確認と併せて児童生徒の状況を把握する。
 - ② 精神的な理由で欠席した場合は、状況に応じてチームで家庭訪問を行う。
- (3) 不登校（不登校傾向）の児童生徒に対して、チームを編成し支援を行う。
 - ① スクールカウンセラーや特別支援コーディネーターと連携し、児童生徒に合わせた対応をとれるように、ケース会議を開いて検討し、組織で対応していく。
 - ② 情報交換の時間を設定し、現在の状況、対応方法などを、全職員で共通理解する。

III 1年目の研究

令和4年5月の意識調査では、各小中学校共に「みんなで何かをするのは楽しい」の質問項目の数値が、他の質問項目に比べ高いことから、みんなで力を合わせて何かに取り組みたいという思いをもっている児童生徒が多いと考えられる。しかし、「学校が楽しい」と「授業に進んで取り組んでいる」、「授業がよくわかる」の質問項目が他の項目に比べ数値が低く課題として挙げられた。

そこで、各学校では「学校が楽しい」と「授業に進んで取り組んでいる」の数値を改善するために、仲間の活動を認め合う活動やみんなで力を合わせ、楽しいことを計画・実行した経験やみんなで課題を解決する学習、個別指導など今まで各学校で取り組んできたことを発展させながら、居場所づくり・

絆づくり事業に取り組んだ。

令和5年1月には、秋田公立美術大学の野々口浩幸教授を招いて、「不登校・いじめを生まない人間関係づくり」と題した講演を中学校区で行い、良好な人間関係づくりにおいて大切な視点を共有し、組織的対応力と指導力の向上を図った。

試行錯誤の1年目であったが、PDCAサイクルに基づく意識調査を年3回、定期的実施することによって、子どもたちの声を手がかりにしながら研究を進めることができた。先生方からも職員の児童生徒理解が深まり、子どもたち一人一人に目を向ける意識が向上したとの前向きな声を頂いたが、本調査研究に対する教員の理解に差がみられ、担当者任せになりがちだった点と、小中が連携した体制づくりが若干曖昧なままだったことが課題に挙げられた。



野々口教授による研修会の様子

IV 2年目の研究

4月当初、新しく赴任してきた先生も交えて、2年目のプラン及び、年間目標達成への手立て（I期）を昨年度の振り返りしながら作成した。

令和5年5月に行われた連絡会議の中で、授業においては「六戸町の学習スタンダードの定着と活用」を生かしながら、小・中学校で「探究型」授業の実践に取り組み、グループやペアでの交流活動を通して、「授業に主体的に取り組み、授業がよくわかる児童生徒」の割合を増やすことを目標とした。

また、全学年とも「みんなで何かをするのは楽しい」という児童生徒が多い点を生かし、1年目からの継続で、各校の取組をさらに発展させながら、小中連携の取組を増やしていくことで、中1ギャップの解消や小中の交流を増やすことを目標とした。



小学生の中学校体験の様子

1 各校の主な取組

(1) 開知小学校

- ・校長と児童会による毎朝の挨拶運動で明るく全校児童を迎える。
- ・児童会による自主的な活動の中で全校児童の中に温かい人間関係を作る。
(新入生を迎える会、全校かくれんぼ、球技大会など)
- ・人とのかかわりの時間を意識的に多く設けることで、自分の存在感やみんなで取り組むことのよさを体験させる。(授業でのペアやグループ活動、係活動、お楽しみ会など)
- ・本校のシンボル「ひまわり」や花の苗を縦割り班で世話する「ひまわり活動」に取り組む。
- ・「探究型」の授業やハンドサインの活用で全員参加型の授業を行う。
- ・一日を振り返る時間を設け、友だちの良さががんばりに目を向けさせて称賛し合う。
- ・子どもたちの実態に合ったソーシャルスキルトレーニングを行っていく。(よりよいかかわり方)
- ・各学級で「いじめノックアウト宣言」を考え、いじめをなくすための宣言を話し合い、校内に掲示。



ひまわり活動の様子



新入生を迎える会の様子

(2) 大曲小学校

① 大曲小学校いじめま宣言を行う（通年）

- ・いじめを少なくするための個人の目標を、いじめま宣言（青森県警が配布）の用紙に書く。
- ・個人で作成したいじめま宣言をもとに、学級で意識するいじめま宣言を決め、学級のいじめま宣言の用紙に書く。（職員室前の掲示板に掲示）
- ・代表委員会（4年生から6年生までの児童で構成）で、各学級のいじめま宣言をもとに、大曲小学校全校で意識するいじめま宣言を決める。
- ・前期児童会総会で、決定した大曲小学校のいじめま宣言を発表する。

【今年度の大曲小学校のいじめま宣言 「いじめなし 相手の気持ちを考える大曲っ子」】

- ・全校朝会や児童朝会で、全校で唱和する。

② 学校スローガンの設定と意識付け（通年）

- ・行事ごとに設定していたスローガンを一本化し、児童が1年間を通して、常に意識できる目標を設定する。
- ・4年生から6年生までの各学級で話し合った内容をもとに、代表委員会を開き、今年度の大曲小学校のスローガンを決める。

【今年度の大曲小学校のスローガン 「助け合い 笑顔を生み出す大曲っ子」】

- ・全校朝会や児童朝会で、全校で唱和する。

③ いいところメガネ・絆キャンペーンの取組（通年）

- ・クラスの友達の良い所をいいところメガネの用紙に書き、各学級に設置している郵便ポストに入れ、放送で紹介する。
- ・行事や縦割り班での活動、学年を跨いだ活動で、他の学年の友達の良い所を、いいところメガネの用紙に書き、郵便ポストに入れ、それを運営委員会の児童が届ける。（異学年の絆を繋ぐ、絆キャンペーン）
- ・ZOOMを活用した小中合同の挨拶運動を実施した際に、お互いの挨拶の良かった部分を手紙に書いて届け、届いた手紙を全校児童に掲示や放送で紹介する。

④ ハートフルタイムの実施（通年）

- ・朝の20分間を活用し、2つの学年が体育館に集まり、絆を深めるためのレクリエーションやゲームを行う。
- ・低学年は教師主導で、高学年は児童が主体となって、進行する。

⑤ 六戸町の学習スタンダードの定着と活用

- ・授業の振り返りの中で友達の考えを取り入れるように指導する。
- ・グループで課題解決に取り組む時間を設定し、協力することで得られる達成感を実感させる。



(3) 七百中学校

① 自ら学ぶ姿勢をつくるために

- ・研究主題「主体的に課題を解決する生徒の育成～探究型授業の実践を通して～」のもと、ペア、グループによる対話を取り入れた授業実践を意識して行う。
- ・授業内で対話を行う際に、かかわり方スキルを用いたり、活動や授業の終わりに振り返りを行ったりして、対人関係スキルの向上を図る。

② 人間関係づくりのスキルアップのために

- きずなタイムを活用した自己分析を行う、またアンガーマネジメント力などの習得を図る。
- 学級会を開催し、合意形成することの難しさを体験させながら、相手の意見に耳を傾け、折り合いをつけることの大切さに気づかせる。

③ 奉仕活動、「立ち止まって挨拶」の習慣化

- 当たり前向上週間（毎学期）を設定し、各委員会で学校生活向上の取組を企画して行う。
- 奉仕活動、立ち止まって挨拶をリーダー中心に呼びかけを行う。
- ハッピースマイル運動（全校挨拶運動）を部活動、委員会を中心に行い、活気のある挨拶ができる雰囲気全校で作っていく。



きずなタイムの様子



探究型授業の実践

2 小中連携の取組

- 小中連携で行っている取組を再度確認しながら、実践してきた。
（家庭学習9か月計画、基本的な生活習慣の形成、六戸町の学習スタンダードなど）
- 夏季休業中、中学校1年生が小学校へ訪問し、学習の補助を行うサマースクールの実施
- 月1回、小中合同挨拶運動の実施（ZOOMを活用して）
- 小学生の中学校体験（長期休業中の部活動体験も含めて）
- 令和6年1月には、六戸町教育委員会の横山祥人指導主事を招いて、「安心できる居場所・人間関係づくりのために」と題した研修会を行った。

V 成果と課題

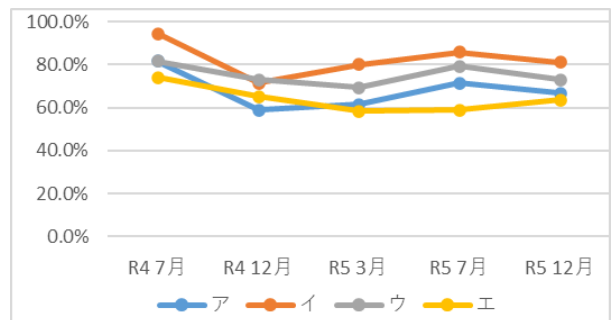
1 意識調査の分析及び考察

意識調査の結果から、特に3回目（令和4年12月実施）と7回目（令和5年12月実施）の数値の変容について分析と考察を行った。これは、本事業を1年間継続してみてもの結果を比較するためである。なお、小学校の数値は2校の数値を合わせたものである。

ア 学校が楽しい イ みんなで何かをするのは楽しい
ウ 授業に主体的に取り組んでいる エ 授業がよくわかる

【小4→小5】

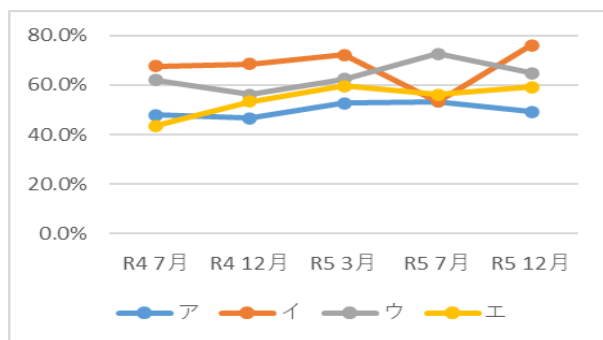
	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 7月	R5 12月	
ア	81.5%	58.7%	61.5%	71.4%	66.7%	↑
イ	94.4%	71.4%	80.0%	85.7%	81.0%	↑
ウ	81.5%	73.0%	69.2%	79.4%	73.0%	
エ	74.1%	65.1%	58.5%	58.7%	63.5%	



特に「ア 学校が楽しい」と「イ みんなで何かをするのは楽しい」の数値が上昇傾向にある。小学校で行われている人間関係づくりの取組が児童の居場所づくりへと繋がっていると考える。

【小5→小6】

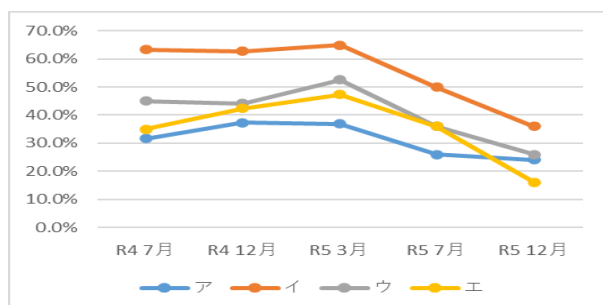
	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 7月	R5 12月	
ア	47.9%	46.6%	52.8%	53.4%	49.3%	↑
イ	67.6%	68.5%	72.2%	53.4%	76.1%	↑
ウ	62.0%	56.2%	62.5%	72.6%	64.8%	↑
エ	43.7%	53.4%	59.7%	56.2%	59.2%	↑



全体的に数値の上昇が見られる。特に「イ みんなで何かをするのは楽しい」と「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」の数値が高く、様々な活動にも意欲的に取り組む集団に成長していると考えられる。

【小6→中1】

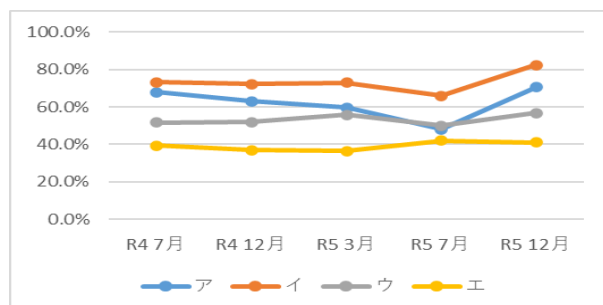
	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 7月	R5 12月	
ア	31.7%	37.3%	36.8%	26.0%	24.0%	↓↓
イ	63.3%	62.7%	64.9%	50.0%	36.0%	↓↓
ウ	45.0%	44.1%	52.6%	36.0%	26.0%	↓↓
エ	35.0%	42.4%	47.4%	36.0%	16.0%	↓↓



全体的に数値の低下が見られ、特に「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」と「エ 授業がよくわかる」の数値が3割を切っている。中学校1年生という学習内容の難しさや中学校生活に慣れてきた頃の調査だったこともあり、生徒個々の意識に大きな差が見られたのではないかと考える。

【中1→中2】

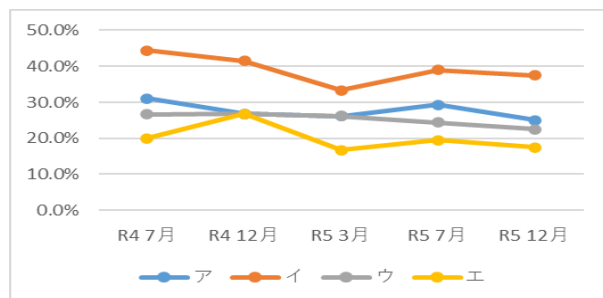
	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 7月	R5 12月	
ア	67.9%	63.0%	59.6%	48.0%	70.6%	↑
イ	73.2%	72.2%	73.1%	66.0%	82.4%	↑
ウ	51.8%	51.9%	55.8%	50.0%	56.9%	↑
エ	39.3%	37.0%	36.5%	42.0%	41.2%	↑



充実した学校生活を送っている生徒が多く、特に令和5年度の12月の調査では「ア 学校が楽しい」と「イ みんなで何かをするのは楽しい」の数値が7割を越えている。学年として、調理体験や修学旅行などの行事で仲間の良さに気づき、認めあう雰囲気が醸成されてきていると考えられる。

【中2→中3】

	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 7月	R5 12月	
ア	31.1%	26.8%	26.2%	29.3%	25.0%	
イ	44.4%	41.5%	33.3%	39.0%	37.5%	↓
ウ	26.7%	26.8%	26.2%	24.4%	22.5%	↓
エ	20.0%	26.8%	16.7%	19.5%	17.5%	↓



全体的に数値の低下が見られる。しかし、最上級生としての自覚をもち、学校の教育活動全体を通して、様々な場面で下級生をリードする姿が十分にみられた。

2 成果

- (1) 児童生徒の居場所・絆づくりに取り組んだ結果、特に小学校の数値の上昇が見られ、児童生徒が互いを認め、向上し合える雰囲気づくりができていた。
- (2) 教職員の意識に向上が見られ、どの学校も生徒指導の4つの視点を生かしながら、授業改善に取り組むことができた。また、児童生徒が安心でき、自己存在感や充実感を感じられる場を作り出す絆づくりをすることができた。

3 課題

- (1) 全体的に数値が低下している学年もあり、その原因が何なのか、どのように改善を図っていく必要があるのかを具体的に検証し、取組の質を向上させる必要がある。
- (2) 特に小学校6年生から中学校1年生の数値が低くなっており、小学校から中学校への円滑な接続に今後の課題があると考え。中1ギャップを生まないよう、さらに小中連携を進める必要がある。

4 調査研究のまとめ

【令和4、5年度 長期欠席者（欠席30日以上）の状況】

令和4年度

開知小	小4	小5	小6
新規数	0	0	0
継続数	0	0	0

令和4年度

大曲小	小4	小5	小6
新規数	0	0	0
継続数	0	2	0

令和4年度

七百中	中1	中2	中3
新規数	2	0	0
継続数	0	0	0

令和5年度

開知小	小4	小5	小6
新規数	0	0	0
継続数	0	1	0

令和5年度

大曲小	小4	小5	小6
新規数	0	0	0
継続数	0	0	2

令和5年度

七百中	中1	中2	中3
新規数	1	3	4
継続数	0	2	0

(令和4、5年度児童生徒指導状況報告書より)

令和4、5年度の不登校児童生徒の状況は上記のとおりである。令和5年度の結果は2学期終了時の数値であるが、この時点で小学校の新規の長期欠席者は抑えることができているが、中学校の新規の長期欠席者が増加している。これは、起立性調節障害などの学校生活に影響を及ぼす症状を抱える生徒などが増えているためである。

本事業を通して、教職員の同僚性や不登校に対する意識が高まったことにより、継続や新規の不登校生徒への支援においても、ケース会議を開いたり、外部機関との連携を深めたりするなど、学校としても組織的対応が活性化された。人間関係づくりが原因で不登校になった児童生徒も多いが、児童生徒を取り巻く複雑な家庭環境や本人の状況など大きく変化していることもあり、状況に応じながら、適切に丁寧に児童生徒へ対応していくことが大切であると考え。

最後に、2年間にわたる本事業は今年度で終了となるが、来年度も定期的に児童生徒へのアンケートを続けながら、居場所・絆づくりの視点を生かした生徒指導、授業改善に各校で取り組んでいきたいと考えている。1年後の六戸学園への移行も見据えながら、今後もいじめや不登校の未然防止に向け、様々な児童生徒が安心して学校生活に取り組み、満足感や充実感を得られる魅力ある学校づくりを中学校区全体で取り組んでいきたい。